

## 博士号学位請求論文審査要旨

報告番号 甲 乙 第 号

氏名 関根 謙

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授

杉野元子

副査 慶應義塾大学文学部教授

山本英史

副査 慶應義塾大学経済学部教授

長堀祐造

副査 復旦大学中文系教授

李 振声

論文題目

抵抗の文学——国民革命軍将校阿壠<sup>あろう</sup>の文学と生涯

本学位請求論文は、現代中国文学史において特異な位置を占める作家・詩人、阿壠（本名陳守梅 1907～1967）に関する、日本、中国さらには世界を通じて初めてとなる総合的研究である。阿壠は日中戦争中の南京陥落の状況を中国人としては初めて長編小説として書き上げた作家である。同時に、優れた感性と鋭敏な理論で中国現代詩壇においても燦然と輝く詩人で、中国現代文学史上、当然記憶されるべき人物であったが、中華人民共和国建国後間もなく起こった「胡風反革命集団事件」の中心人物として逮捕投獄され、12年間の拘禁生活ののち、獄死したため、従前、その業績は国内外において正当に評価されることはほとんどなかった。死から13年、文化大革命後の1980年、中国共産党によって阿壠に対する名誉回復措置がとられた結果、その文学の見直しが始まるが、阿壠自身の複雑な政治的経歴と現代中国の政治状況のため、公開資料は限られ、その業績の出版も散発的で、関係者の回想録も完全なものとは言い難かった。こうした困難な状況のもとで、地道な実地調査と関係者への聴き取りや、その過程で入手した一次資料の丹念な解読を通して結実した本研究は、著者20年来の成果の集大成である。本研究は権力に抹殺された文学者阿壠への真摯な敬意に立脚し、その獄死に到る伝記的真実を明らかにするとともに、阿壠の代表作、小説「南京」の解読、さらにはその詩や詩論の分析にまで到り、阿壠文学の成就の地平をも明らかにしている。こうした意味で、本研究は日本、中国、世界において、今後の阿壠研究の礎となる記念碑的作品であることは間違いない。

## 【論文の構成】

次に本論文の構成を述べる。本論文は全五章からなっている。

序文 阿壘とその時代

- 1、 中国一九五〇年
- 2、 「阿壘」という文学者
- 3、 本書の構成

第一章 国民革命軍将校陳守梅と文学者阿壘

---少年時代と国民革命軍将校への道、長編小説「南京」の誕生

- 1、 父母と青少年時代
- 2、 杭州商人の「学徒」から国民党入党、左派「改組派」への参加
- 3、 中国公学から黄埔軍官学校へ
- 4、 黄埔軍官学校と初めての戦役
- 5、 戦場での負傷と「再生の日」
- 6、 上海最前線撤退から延安到着まで
- 7、 延安にて、抗日軍政大学での日々
- 8、 延安から西安へ、長編小説「南京」執筆の日々

第二章 愛と流浪の歲月

---重慶での生活、愛情とその破綻

- 1、 重慶陸軍軍令部少佐として生活、胡風への思い
- 2、 重慶陸軍大学学員の生活と張瑞との出会い
- 3、 張瑞との恋愛と結婚、その破綻
- 4、 阿壘夫人瑞の自殺をめぐるそのほかの証言
- 5、 抗日戦争終結後内戦時期、重慶における共産党への情報提供
- 6、 重慶・成都における阿壘の文芸活動、重慶脱出の経緯
- 7、 杭州に帰ってからの生活と南京

第三章 冤罪の構図

---殉道者阿壘、その死の意味

- 1、 杭州戦役から人民共和国建国、上海から天津へ
- 2、 人民共和国の時代、杭州から天津文壇の指導者へ
- 3、 共産党政権下の文芸活動と「胡風事件」への布石
- 4、 一九五〇年の論争とその終わりのない再現
- 5、 胡風批判の展開と阿壘逮捕までの経緯
- 6、 阿壘逮捕から公判まで、阿壘絶筆と獄中の断片
- 7、 阿壘の死、家族の証言
- 8、 阿壘の死の意味——本章の結びに代えて

#### 第四章 長編小説「南京」とその意義

##### ――半世紀を経て甦る戦争文学

- 1、 長編小説「南京」の概要——中国語版『南京血祭』と日本語版『南京慟哭』
- 2、 作品『南京血祭』の性格
- 3、 阿壠創作の現実認識と象徴性
- 4、 「南京」の文学的達成——日本の作品との比較検討
  - (1) 原民喜との比較
  - (2) 石川達三との比較
  - (3) 日本兵の涙について——「慟哭」の意味
  - (4) 対象化される現実——史実との関連における小説
  - (5) 火野葦平との比較
- 5、 『抗戦文芸』長編小説公募と「南京」発表までの不可解な経緯——統一戦線政策と創作の自主性をめぐる推論
  - (1) 阿壠「南京」が示す問題
  - (2) 戦時首都重慶の新聞・出版界の状況
  - (3) 郭沫若と胡風
  - (4) 阿壠の反応

#### 第五章 阿壠の詩論について

##### ――抵抗の詩人阿壠

- 1、 阿壠の詩論研究の立場
- 2、 阿壠の詩論の骨格——詩と詩人について
- 3、 詩の言語と象徴性
- 4、 詩における必然性としての技巧
- 5、 阿壠のタゴール観
- 6、 阿壠の詩論に見る「政治」——胡風との差異
- 7、 阿壠文学の特異性——予言としての詩

#### 後記 「阿壠評伝」として

##### 参考文献

##### 阿壠関連写真資料

#### 【論文の概要】

序文において、著者はまず1949年の中華人民共和国建国がそのまま完全なる新国家誕生を意味せず、国民党との内戦過程が継続していたと見て、近代的意味での国家は1950年になって初めて始動したと主張する。そしてその1950年初頭からの共産党政権下での阿壠批判を、国家権力の強固な土台作りのための思想界言論界統制の引き金になったのではないかと考察する。また阿壠という文学者の全体像を提示し、その業績に比して、中国現代文学史における低い評価と遅れた研究実態を紹介し、今後の研究の進化の必要性を力説する。また著

者は序文において、阿壠という筆名の由来を、阿壠と早世した妻との深い情愛にあったことを初めて明らかにしている。

第一章から第三章では、阿壠の人生を、現時点で利用可能な最大限の資料と関係者の新証言をもとに跡付けていく。これは中国の政治状況などの要因により、極めて難しい調査だったことを著者はまず言明し、その限られた資料を駆使した推論の現時点における妥当性を強調する。著者はこれまでいわゆる「胡風分子」とされた文学者やその家族、遺族、友人たちから、丹念に聴き取りを行ない、これらを重要な基本資料として本論を慎重に構築している。この中には著者が入手した 2 本の録音音源、すなわち阿壠（陳守梅）の弟陳守春の詳細な回想と、阿壠逮捕から収監、獄死に至るまでをつぶさに見てきた公安警察担当官劉迺強の証言とが含まれており、阿壠の遺児陳沛から直接入手した原資料など本論によって初めて明らかにされる内容とともに、説得力ある考察の根拠となっている。

第一章では阿壠の少年時代から、国民革命軍将校となって抗日戦争の最前線に派遣されるまでを追跡する。阿壠は杭州の没落した読書人家庭の出身で、少年時代には働きながら文学に接近していたのだが、著者はここで弟陳守春の証言と友人たちの回想録を基に、阿壠少年時代の生活環境を初めて明らかにしている。

阿壠は親の望む商人となる道を拒否し、迫りくる亡国の危機の自覚とともに青年時代を迎え、1927 年国民党に入党、左派「改組派」の活動家となって、やがて黄埔軍官学校第 10 期に合格し、1937 年の上海防衛戦に際しては青年将校として百名の兵を率いて出陣する。著者はこの過程を時代背景から丹念に跡付ける。そして阿壠がこの上海防衛戦で重傷を負い、後方に撤退した際の怪我の状況及び撤退の経緯を、関係者へのインタビューを基礎に忠実に再現している。著者は特に、阿壠の軍人としての高い地位と筆名を駆使しての執筆活動の展開について、所属軍団との関連を合理的な根拠をもとに推定している。たとえば、湖南衡陽の保安団隊での軍人としての活動と作品の執筆、蒋介石の信任の篤かった胡宗南の軍団における阿壠の地位、西安に展開した「戦幹四団」などでの阿壠の活動実態などを明らかにしているのである。阿壠は前線撤退後、湖南、西安からさらに中国共産党の根拠地延安に赴いて延安抗日軍政大学で学ぶのだが、著者は中共中央長江局で周恩来の秘書だった呉奚如と胡風、阿壠の政治的に極めて微妙な関係を慎重に描き出している。

本章において著者は、阿壠がこの時代に延安と西安で自らの見聞を基に長編小説「南京」に着手・完成していく状況を再現し、同時に阿壠が共産党と国民党の間を往来し、国民党軍将校の立場を利用しながら共産党へ重要機密を提供していた状況証拠を提示する。同時に国共両党合作下の公式文芸雑誌『抗戦文芸』は長編小説を公募し、阿壠の「南京」は選考過程で第一位に推薦されたものの、公表・出版はおろか、公募自体が取り消されてしまうという不可思議な事態が出来る事が語られるが、この疑問は第四章で解明される。

著者はまたこの時期、胡風主宰の雑誌を通して、阿壠の文名が馳せ始めると、国民党軍の高級将校と個我を尊重する自由な文学者との狭間で葛藤する阿壠の

心情を解析し、同時に当時の阿壘の恋愛関係について、陳沛の証言や近年刊行された『阿壘胡風往復書簡』の内容をもとに、周鈺あるいは何未秀という女性に対する阿壘の感情の航跡を辿っている。

なお本章では、従前等閑視されてきたこの時期の中国文芸界への阿壘の参与状況についても、ゴリキーの企画を中国に応用して注目を浴びた報告文学集『中国的一日』（1935年、茅盾編集）への阿壘の投稿など、新しい事実を発掘している。

第二章では、阿壘が軍部において国民党軍参謀将校、国民党陸軍大学教官となって昇進しながら、独特の感性で優れた詩作を続け、文芸に対する考察を深めていく重慶時代を描く。著者はまず、この時代、阿壘が軍人、文学者両面において飛躍的に実力を向上させ、特に胡風及びその友人たちと急速に交流を深めていったことを指摘する。四川の山岳都市重慶は戦時中国の首都であり、阿壘がここに駐屯していた時期、政治・経済・軍事はもとより文化的にも中国の中心で、非常に活動的な大都会だった。このころ阿壘は軍務で成都にも長く滞在したが、ここで十五歳も年下の女性張瑞と出会い、激しい恋愛を経て電撃的に結婚する。著者はこの熱烈な恋愛の経緯を関係者数人の回想録によって再現する。著者は、成都において数度にわたる実地調査を行い、張瑞の実家と思しき邸宅跡を探し当てている。張瑞は成都の名家出身の文学愛好者で、成熟した阿壘の人格に強い憧れを持っていたのだが、その結婚生活は不幸な終焉を見る。著者は阿壘の結婚から新婚生活、息子沛の誕生、張瑞の思いもよらぬ不幸な自殺までを、関係者の証言と回想を基に描く。陸軍大学に籍を置いていた阿壘は、新婚生活を無味乾燥な軍宿舎で過ごさざるを得ず、文学少女だった新妻張瑞は辛い日々を過ごす。抗日戦争に勝利する一九四五年八月、二人の間には男子が誕生するが、次第に苦悩を深めていった張瑞は、この乳呑児を残して突然自殺してしまうのである。著者は、この孤独と深い闇の淵で苦悩する阿壘が、軍務と文学者としての活動の複雑な関係の広がりの中で、中共への情報提供を密告され、国民党の追及から江南へ逃亡せざるを得なくなる経緯を考察している。この時期、多くの劇的な経験を経て阿壘の文学が独自の高い格調を帯びてくると言う。

本章において著者は、現地調査により上述の張瑞の実家跡のみならず、阿壘と友人たちが暮らした重慶の古い下町「山城巷」、陸軍軍令部跡、歌樂山中「山洞」に置かれた陸軍大学跡、陸軍大学宿舎跡などもほぼ特定している。また成都調査の過程で、自殺当時の張瑞との関係が噂されていた詩人杜谷への聴き取りを、日本の研究者として初めて行い、張瑞自殺の前日に杜谷が彼女と会っていたという証言を本人から得ている。

第三章では人民共和国建国前夜から胡風事件での逮捕、獄死に至るまでの阿壘に焦点を当てる。従前の証言・研究では、重慶から逃亡した阿壘の行先は南京とされてきたが、著者は阿壘が最初、杭州の実家に戻って生活を始めていたことを友人たちの回想から証明する。阿壘は変名を使い、南京気象局に職を得るが、程なく本名陳守梅で南京の陸軍参謀学校に復帰し、階級も大佐に昇進し

ていたことが判明する。著者は、成都陸軍学校から指名手配を受けていたはずの阿壘が、昇進して軍校に地位を得たのは、陸軍参謀学校が成都から南京に一部移転で成立した教育機関であること、またこの時期、蔣介石の下野で一時李宗仁総統が誕生しており、蔣介石勢力と対決姿勢が強まるなど国民党軍部内での対立抗争があったことに原因があり、それが同校の阿壘＝陳守梅大佐招聘に繋がったのではないかと推論する。著者は杭州、南京で綿密な調査を行っており、これが単なる推論に止まらないことを強調する。

また、本章で著者は、弟守春の証言を基に、人民解放軍による杭州解放前夜、阿壘の同軍第三野戦軍司令王建安上將への直接的な軍事情報提供の意義を検証し、人民共和国建国後の阿壘の天津異動にその功績が影響していたことを指摘する。

人民共和国建国まもなく、阿壘は上海鉄道局公安部を経て天津文壇に異動し、共和国公認の文学者としての人生をスタートさせる。著者は、阿壘批判がこの動きと間髪を入れず展開され、新中国建国が実は阿壘の厳しい後半生の始まりとなった点を強調する。そして阿壘批判の詳細を追いながら、批判する側の非論理性、非合理性、強引で執拗な批判運動の展開を検証する。また胡風事件による阿壘の逮捕後の実像を、公開された資料と関係者の証言を根拠に可能な限り忠実に再現しようと努めている。現在阿壘の原資料は子息陳沛からの委託を受けて北京魯迅博物館胡風文庫に所蔵されているのだが、著者はこれらを調査し、また陳沛の保存する他のデータも確認している。本章での考証の根拠は、これらの貴重な資料群である。

胡風事件での阿壘逮捕は1955年5月だったが、著者は魯迅博物館から公表された阿壘の毛沢東宛書簡、および雑誌『新文学史料』に掲載された獄中の阿壘の絶筆「上申書」を丹念に解読し、阿壘逮捕の状況に関しては陳沛の証言と回想に基づいて詳細な再現に努めている。阿壘の教え子で同じく、胡風事件で逮捕された林希の回想によれば、1965年の公判における阿壘の孤高の姿、しっかりした足取りと昂然と頭を上げた表情は、冤罪への屈服を断固として拒み、自己の無罪を誇り高く物語っていたという。獄中の阿壘は時折ハンガーストライキを行い、看守らはこれを自殺願望と見なしたが、著者は阿壘が結局のところ、死の誘惑に抗し、厳しい生の道貫いていたに違いないと強調する。獄中の阿壘に関する資料は極めて乏しいが、著者は直接入手した公安警察担当官劉迺強の証言録音などを駆使して、阿壘の獄中生活を忠実に再現している。

本論第四章と第五章は阿壘文学の芸術性を確認し、現代中国文学史における正当な評価への基礎となる論述である。

第四章では阿壘の長編小説「南京」について、執筆当初から発表までの経緯と原作者の死後二十年、原作の執筆後半世紀を経て、中国でようやく刊行されるまでの過程を詳らかにしつつ、「南京」の文学的な意義を検討していく。阿壘の「南京」原稿は当時の重慶政府公認の文芸機関誌『抗戦文芸』長編小説公募において第一位に認められた傑作であったにも関わらず、出版を見送られた。中国での正式な刊行は半世紀後1987年の事であり、タイトルも『南京血祭』と改められ原稿の字数も原作の半分ほどであった。これは阿壘名誉回復後の記念的出版であったが、その刊行に至るまでには多くの友人たちの献身的な努力が

あったと著者は指摘し、『南京血祭』の文学上の到達度を詳論する。また、著者は『南京血祭』の戦争文学としての質的分析を通して、南京陥落を描いた他作品との比較検討を進め、特に日本の石川達三、火野葦平の文学との比較を通して、現代日本における南京大虐殺否定論に、文学の立場からの反証を行う。『南京血祭』（「南京」）は当時もそれ以後も喧伝されてきたような単純な抗日小説とは全く異なる文学として成立しており、本章において著者はその詳細な分析を多角的に行っている。

著者は、阿壠という作家の筆力の高さを『南京慟哭』（著者による『南京血祭』の日本語訳）の空襲の描写を例に証明し、この描写が原民喜の『夏の花』と感覚的に共通することを提示する。また石川達三との比較においては、知識人の戦争参加の問題を検討し、日中両国の侵略・被侵略の立場の違いが、兵士たちの「倫理観を抹殺する戦争」と「倫理観を昂揚する戦争」の立場の違いに連なると指摘する。そして南京挾江門で展開した実際の悲劇を日中両国の文学者が描いていることを指摘し、戦争の史実と文学の描写の関係を確認していく。火野葦平との比較においては、侵略する側の通信兵として百万部のベストセラーとなった火野作品とは対照的な阿壠の立場を明示し、倫理的正義に発する人間性の発揚の中でしか戦争の勝利はないと阿壠が確信する過程を考察している。

本章において著者は、阿壠の作品投稿から出版不能に到る事情を考察し、『抗戦文芸』公募の経緯に関する胡風の説明の食い違いを胡風と阿壠との往復書間によって解析している。ここでは胡風における政治重視と阿壠の文学的真実優先という考え方の相違が指摘され、当時胡風に掛けられたトロツキスト嫌疑の問題を、胡風と郭沫若との論争から追跡し、それが中国軍の負の側面も描き込んで政治的に微妙な部分を含む阿壠の「南京」の事実上の出版差し止めに繋がった可能性を指摘している。

第五章では阿壠の詩論を概観し、阿壠文学について現段階での文学史的総括を行う。阿壠の詩論は一九五〇年の大著『詩与現実（詩と現実）』全三巻にまとめられているのだが、やはり刊行と同時に激しい批判にさらされ、ほとんど販売できないまま絶版となった。著者はこの不遇の大著に阿壠の詩への熱い思いが込められているばかりでなく、彼の文芸に対する揺るぎない思考と確信が論理的に述べられていると指摘する。『詩与現実』は阿壠名誉回復後、いくつかのアンソロジーのなかにその中核的な論考が収められており、著者は本章でそれらを基本にしながら、阿壠のそのほかの文芸評論、散文をも考察対象としている。そのなかで阿壠の詩論の柱である、詩人の表現としての詩創作と精神生活の完全一致の境地、表現されるべき内容と詩の技法の自然かつ必然的連結、政治と文学の不可分性、先駆者としての知識人の社会的意義などが明らかになってされていく。本章において著者は、阿壠の詩に大きな影響を与えたタゴールの詩作との関連についても、詳細な検討を行っている。

阿壠は個性の発揚なくして集団の強化はあり得ないとし、詩の魂の発揚が強ければ自ずと適切な韻律と節奏が生じ、必然的な技巧に結びつく主張している。政治の要請に応じる詩を拒否し、個我と融合する社会と政治の境地を魂の高みに置く文芸思想こそ阿壠の理想だったと著者は位置付ける。そして、あら

ゆる桎梏の除去と個我の自由な昂揚の保障とを新中国に求めた阿壠の文芸観について考察を進め、新中国が自身の内部に古い体質を深く温存していることに阿壠は挑戦していたのだと結論づける。阿壠の詩の根本的境地は、著者によれば、自然と大地と人間の一体感にあり、象徴主義に強く傾斜していたと言う。

第四章と第五章の考察を通して、著者は阿壠の文学の高度な達成と豊饒な作品内容を高く評価する。そして「聖者阿壠」という天津時代の阿壠を形容する言葉に、阿壠の預言者のごとき先見性と深い自己犠牲の精神、抱いた理想への断固たる信念を見出していく。阿壠は悲惨な死を孤独のうちに迎えなければならなかったのだが、被せられた罪を生涯断固として認めないまま、多くの友人たちの生存のために、そしてたった一人のわが子の安全のために、従容としてその死を迎えたと、著者は最後に強調している。

### 【審査要旨】

本博士号学位請求論文（以下本論と略記する）は、従前、本国中国においても、また、日本においても、研究蓄積の極めて少ない、詩人・小説家、阿壠に関する総括的な研究である。阿壠は、中国当局から「胡風反革命集団」として追及された文学者の中でも、路翎と並ぶ代表的な作家・詩人であり、その小説の代表作「南京」や象徴主義的詩風の詩の実作、さらには中国近現代詩壇では稀な大部の詩論『詩と現実』の作者として、当然、文学史にしかるべき地位を与えられなければならない重要人物であるが、国民党軍人時代から文学活動に参加し、新中国では胡風事件での逮捕と獄死という特異な経歴（胡風事件は今では中国共産党政権によっても冤罪と確定している）のため、その業績の正当な評価、伝記的事実の研究も極めて遅れ、基礎的研究の端緒が開かれたばかりというのが現状であった。そうした中で、本論は、中国、日本のみならず、世界初の「阿壠評伝」であり、また文学的達成をも総括する総合的な阿壠研究である。その功績は、概括すると以下の三点にある。

第一に、本論は従前、曖昧模糊としていた阿壠の少年期から胡風事件での逮捕・獄死に到るまでの基本的な伝記的事実を明らかにし、阿壠の生涯に全体像を与えたことである。

まず、没落読書人家庭に生まれた阿壠が、国民党軍将校となり、日本軍に対する上海防衛戦での負傷、文芸活動の開始、胡風との関わり、「南京」執筆のきっかけ、さらには抗日戦勝利前後の結婚と新妻の自殺という私生活上の蹉跌、ついで、抗日戦後、阿壠が中共への情報提供の廉で国民党から指名手配されながら、国民党軍への復帰を果たすという数奇な境涯、国共内戦時の中共への協力、人民共和国建国後、こうした経歴が胡風事件連座への伏線となったこと、そして、胡風事件での逮捕劇と獄中生活がいかなるものであり、それがどのように死をもって終焉したのかを、新資料や親族や看守など直接的な関係者の証言を丹念に積み重ねることによって明らかにしている。

第二に、阿壠の小説の代表作にして世界史、日中関係史においても極めて重要な作品「南京」の成立過程、国共合作下での事実上の出版禁圧過程、半世紀

後の出版解禁過程を明らかにしたことである。それも単に政治的環境や人間関係から外在的に説明するに止まらず、この作品のテキスト、及びそのテキストを必然とする阿壠という作家の人間の資質、文学的成就の評価にまで踏み込んでいる点は重要である。

1938年、「南京」の原稿は重慶政府公認の文芸機関誌『抗戦文芸』長編小説公募において第一位とされたが、日中双方の軍隊をステレオタイプに描かず、作家的良心に従い、見たままを描写した部分が、政治的に微妙なため、出版が不可能になったのではないかという指摘は十分な説得力をもつ。郭沫若と胡風という中共側の著名な文学者を巻き込みながらの、複雑な中共内の文芸路線をめぐる背景も書き込まれている点は、阿壠研究のみならず中国現代文学史全般にとっても貴重である。

第三に、詩人・阿壠の功績を正当に評価したことである。阿壠の詩の実作を取り上げて分析し、そこに阿壠の詩人としての自己形成期に刻印された、時代の産物とも言える象徴主義的傾向を見出したこと、また、近現代中国の詩人の詩論としての異例の大著『詩と詩論』の内容を精査し、詩創作と精神生活の一致、表現内容と詩の技法の合致、さらには戦争と革命の20世紀において、詩作、文学活動における、政治と文学の不可分性（それは政治の道具としての詩や文学を拒絶するものであったが）の認識、「先駆者」としての詩人・文学者の役割重視、などに阿壠の特徴を見ることは従前の阿壠研究ではなかった斬新な視点である。

なお、些かの瑕疵を述べれば、資料面でのさらなる充実、行論面での一層の工夫がありえたのではないかということがある。

たとえば前者については、中国共産党史関連の資料において、地方の党史文献が使用されているが、やはり中共中央の権威ある最新の文献を使用すべきである。また、胡風、魯迅といった阿壠が直接、間接に親しんだ文学者のテキストをもう少し利用したほうが、より厚みのある論文になったであろう。後者の点では、資料的制限や、そこに起因するインタビュー重視のため、どうしても推論が多くならざるを得ない部分があり、このあたりは今後の課題として、さらなる資料の発見、検証の継続が望まれる。

ただし、これらはさしたる問題ではなく、本論全体の高いオリジナリティと学術的意義がこれによって損なわれることは決してない。

以上より、審査員一同は、本論が博士（文学）の学位に十分値する成果であると判断する。

関根謙君の学識確認をいたしました。

学識確認

慶應義塾大学文学部教授

杉野元子